

《研究ノート》

フランス労働者スポーツマンの
レジスタンス

伊藤 高弘

一 はじめに

本稿は、筆者が在外研究期間中に入手した史料⁽¹⁾ *La vie de AUGUSTE DELAUNE Sportif, héros de la Résistance, ST-MONE et AUGUSTE GILLOT, 1985, Saint-Denis-France* の紹介・抄訳である。A6版、三二ページの小冊子(シモーヌ、オーギュスト・ジロー共著⁽²⁾)は、顕彰と追憶による『証言』としての性格をもつものであるが、対象としたのは第二次大戦下のフランスにおけるレジスタンスに参加した一人の労働者スポーツマンである。日仏両国ともにレジスタンスに関する研究は歴史的蓄積を重ねつつ、最近ではレジスタンス神話にたいするコラボ(対独協力)に光をあて歴史の実像に迫ろうとする研究動向も紹介されている⁽³⁾。しかしながら、歴史学および体育スポーツ史研究上で、レジスタンスに加わったスポーツマンを歴史の舞台にのぼせ検討を加えたものは皆無に近い⁽⁴⁾といつてよい。

未開拓の研究分野であるということは、日仏両国における『スポーツ運動』が学術上、大衆的な文化運動上で認知され、正当な市民権を得ているかどうか、という問題でもあろう。筆者は、一九六五年以来約二〇年間にわたってスポーツ運動の分野で活動してきた。この間数次におよぶ訪仏の機会を得て、主としてFSGT(労働者スポーツ・体操連盟・Fédération Sportive et Gymnique du Travail)と交流を重ね⁽⁵⁾、あわせて研究情報の交換・入手に努めてきた。しかしながらフランスにおいてスポーツと人民戦線やレジスタンス史上でスポーツマンを位置づける研究は、きわめて限定されたものとなっていると思われる。この研究状況は、また歴史的風土とレジスタンス下の栄光と屈辱の交錯した複雑な体験が人心をとらえ離さず、その一方で時間とともに風化しつつある現状をまのあたりにして、一九八五年を前後して後世に残し伝える気運が高まってきたこととも関連していよう⁽⁶⁾。

小冊子の目次は左記の通りである。通し番号は抄訳者によるものである。

序文 ルネ・ムスタールF・S・G・T会長

目次

- 1、溶接工・競歩競技者／
- 2、勝利者オーギュスト・ドローヌ／
- 3、スポーツマンにたいする抑圧／
- 4、スポーツ運動の統一／
- 5、反ファシスト闘争下のA・ドローヌ／
- 6、サン・ドニでA・ドローヌ スポーツの分裂を阻止／
- 7、人

民戦線のもとでスポーツの前進／ 8、大衆スポーツのための提案／ 9、学校で(身体教育、健康管理が)はじまる／ 10、スポーツマンの団結のために／ 11、A・ドローヌの国際活動／ 12、ヒトラーよりは人民戦線を／ 13、ダラディエ「ユマニテ」発行禁止／ 14、パリを無抵抗で明け渡す／ 15、A・ドローヌ サン・ドニへもどる／ 16、逮捕、監禁、脱走／ 17、地下闘争下のA・ドローヌ／ 18、A・ドローヌと再会／ 19、最後の邂逅／ 20、A・ドローヌ スバイの犠牲に／ 21、マンの病院内への潜入計画／ 22、無数の努力が灰燼に／ 23、裏切り者アンドレの正体を暴露／ 24、模範的な生涯／ 25、栄光と尊敬／ 26、国令による表彰／ 27、A・ドローヌ競技場と通り／ 28、A・ドローヌの闘争を継続／ 29、レジスタンス思想にたいする忠誠

(1) 史料リストについては、帰国後報告したものが『研究年報'88』(一橋大学体育共同研究室編集発行) 七一〇ページに掲載されている。

(2) オーギュスト・ジロー (Auguste GILLOT)

A・ジローはサン・ドニ市長を歴任し、一九四三年一月にアンドレ・メルシエにかわってPCFを代表してCNR(抵抗運動全国評議会)に、四四年には司法担当となり解放・戦後改革に加わった。今日、A・ドローヌの同世代の指導者で生存しているのは、R・ガッティニョ(元FSGT会長)、H・セガール(元国際部長)など限られた人びとであり、しかも、A・ドローヌとは人民戦線時代からバー

ジまでの僅かな期間しか接触が許されなかった。したがって、A・ドローヌを労働者スポーツマンとレジスタンスのいわば地上と地下の二層にわたって描きあげえる人物は、A・ジローを置いて他になかったともいえるのであろう。なおA・ジローのCNRの関係についてはH・ヌーゲル『フランスにおけるレジスタンスの歴史』(ロベール・ラッホン、一九七六、一九八一) 4の三五四ページと5の二一ページを参照されたい。

(3) 平瀬徹也「第二次世界大戦と民衆―大戦下フランス民衆の意識と行動―」、『歴史評論』一九九〇、八、二九―三九ページ。

(4) フランソワーズ・アッシュ「フランスの労働者スポーツ 二つの転換点 一九三六年と一九八一年」(上野卓郎編訳『国際労働者スポーツ』、民衆社、一九八八、所収)では、当該の人物について四行の紹介がなされている。九七―九八ページ。

(5) ルネ・ムスタール著、早川武彦訳『フランスのスポーツ運動』(青木書店、一九八七)によせた拙稿「刊行の意義」(三一―八ページ)を参照。

(6) J・デフラヌ著、長谷川公昭訳『ドイツ軍占領下のフランス』(文庫クセジュ、一九八八)の「訳者あとがき」を参照。長谷川が紹介しているように、一九八五年前後は、かつて「自由バリ委員会」を率いて、一九四四年八月二五日のバリ解放に貢献したA・トレを先頭とする関係者の多

年の努力が「国立レジスタンス博物館」(パリ郊外・シャ
ンピニー)設立として結実しはじめたころでもあった。

序文

活動家A・ドローヌの政治行動とスポーツ生活は、確固としたものでありました。抵抗運動家、愛国者、労働者スポーツマンとしての彼は、画期の諸条件のもとで、人民の福祉、安寧、平和、自由のための闘争と、わかちがたいスポーツの前進のために活動し名声をあげました。

シモーヌとオーギュスト・ジローは、彼の活動の再現ばかりでなく、この期間の労働者スポーツ史上の重要性について、私たちの知識を豊かなものにしてくれました。ここに夫妻に対して感謝の気持ちを申しあげます。

活動家同世代の権化でもあったドローヌは、困難な諸条件のもとでありながら、威厳と責任をもって労働者階級の諸権利の獲得のために不平等や差別と闘い、よりよく生きるための労働者階級の諸要求、とりわけ彼自身の活動基盤でもある労働者スポーツの組織化のために、新機軸の道を拓きました。

彼が生れた一九〇八年は、また最初の労働者スポーツ連盟(FST)の基礎が築かれた年でもありました。そのご彼は一九二一年に会員となるのでありますが、第一次大戦後FSTは再建されたのであります。それはまた労働者スポーツマンが自らの責務として、不十分なグラウンド、施設や更衣室の改善に努めたり、時折の競技会禁止の措置にたいして、警察に異議申

立ててをするという時期でもありました。

彼は一九二三年以来分裂していた二つの労働者スポーツ連盟の統一の基礎を築き、一九三四年に統一されたF・S・G・T(フランス労働者スポーツ・体操連盟)の書記長に就任しました。一九二一年からヒトラー・ファシズムの攻撃のために三五歳で悲劇的な死を迎えるまでの間、彼は労働者スポーツの基本的な財政基盤の確立のためにも貢献しました。

解放後四十年の今日、もしも彼が存命であれば状況は大きく変わったことでありましょう。当時の彼を手本とした同志たち同様に、今日でも彼を必要とし、私たちの時代に適合した道すじをみつけ、つくりだしたでありましょう。私たちはA・ドローヌによって導びかれた闘争をしっかりとすすめるために、基本的な学習を怠らないようにしようではありませんか。

一九八五年六月

ルネ・ムスタール F・S・G・T会長

二 人民戦線時代の活動一

抄訳の理解のために①

第二インタナショナルの分裂崩壊は、政党・労働組合・スポーツ組織の内部に癒しがたい傷跡を残した。フランスの場合も例外ではなく帝国主義戦争反対派と右翼的階級的裏切り派の溝は大きくひろがり、協力共同あるいは再統一の気運が高まり、行動の第一歩を印すには十数年の歳月を必要とした。とくにフランスでは、一九三三年のナチスの抬頭と対照的な社会民主党、

共産党・労働者階級の懐滅的な状態、さらに国内のファシスト分子の盲動により、スポーツ分野で一氣に再統一が実現した。再統一を果たしたFSGTは人民戦線運動の一翼を担い、「体育・スポーツ九項目要求」をかかげ政策実現のために奮闘し、ドロイヌ書記長はその先頭になった。

7、人民戦線下のスポーツの前進

ドロイヌによって指導されたスポーツ連盟は、この統一行動によって会員は三万人から一三万人へと急増するなど多くの成果をあげた。人民戦線政府では、社会主義者レオ・ラグランジュが余暇・スポーツ担当相に就任した。この最上の措置は、ドロイヌが彼のスポーツについての知識とすぐれた経験を認めていることに他ならなかった。ラグランジュは、ドロイヌに体育・スポーツ高等評議会のメンバーに就任するよう要請した。彼はまた、財源にたいする無関心が支配するなかで、新しいポストで認められる権限とすべての知識を活用してスポーツの事業に貢献した。人びとは、配慮の行届いた野外・体育・スポーツ活動の発展を支持した。全青年は、信頼と幸福感のうちに「さあ、スポーツを生活の前面に」と唱和したものだ。

ドロイヌは、長期旅行に出掛け、経験豊かな存在としてもどってきた。思慮深い存在として復帰した彼は、フランスのスポーツ状況に関する研究にとりくみ、PCFの理論誌上で公表するための執筆活動にとりくんだ。そのタイトルは「フランスの全青年に、健康とスポーツをとりもどそう」。それからのち、一九三七年六月二十日のことであるが、ドリオの解任に伴なう

サン・ドニの地方選挙にたいして局地的な排除が行なわれる、という事件が発生した。この田舎の困難な選挙の過程で彼は、私たちの周辺で重要な部分を担当した。私は選挙の結果を知らされた時、再び彼に拍手を送った。ドリオは、私たち人民戦線の選挙人名簿が一〇、六三三票を獲得したのにたいし、六、五〇七票にすぎず打ちのめされた。

8、大衆スポーツのための提案

「ユマニテ」(一九三六、五、五)は、PCFの宣言を発表した。その核心は、体育・スポーツの諸問題に言及したものだ。「私たちは、体育事業の再編成を要求する。青年が輝やくばかりの健康で強固な身体を持ち主となるために、数百万の青年が健康に適した実践がたやすくできるように、そしてまた我が国のスポーツの斜陽化をくいとめるために」。この宣言は広範なスポーツマンの間で歓迎された。なにしろ、スポーツは金がかかるし、私的にやることだと理解されていたのだから。

この報道に関して、スポーツ紙「オート」編集長アンリ・デグランジュは「ユマニテ」にたいしてインタヴューを申し入れた。「私の考えでは、野外で労働者スポーツが公明正大に行なわれていることを認めます。しかしフランスのスポーツ運動は、くだらない人たちによって管理され、金銭によって腐敗していると思います。もしも貴方がたの党が、資格・権限のある成人、青年によってスポーツの管理ができることを、そしてギャンブルを排除することができることを確信するならば、スポーツはフランスにおける巨大な事業として再生するでしょう。」

しかしその地平に到達するためには何と多くの変化が必要なことだろう。人びとはその状況についてどんな想像をするのだろうか。スポーツの予算は、一九二八年には五、五〇〇万フランまで上昇したが、一九三六年の人民戦線出現前では三、一〇〇万フランにまで下ったのだ。フランスの三八、三六五の自治体に関してみると、その内三五、四九〇が何らかのグラウンドや競技場を保有していなかった。それでも主要な目標のブルドについて四三ヶ所を数えあげたが、これとて財政上の理由のため不十分であった。学校でも青年用のグラウンドなし、身体文化用の体育館なしの有様だった。

(一) 戦後は「レ・キップ」と紙名変更。

11、A・ドローヌの国際活動

この偉大なスポーツの指導者は、スポーツが民衆の間で平和と友情をつちかう関係の強化に役立つことをよく理解していた。彼は、国際労働者スポーツマンの団結のための、三者による委員会(1)のメンバーでもあった。彼は各国を訪問し、各競技間のスポーツマンの交流とスポーツの現状についてこまかく調査し、そのために時間を惜しまずに活動した。たとえば、彼はクルルヌイブスポーツ公園で開催された「ユマニテ」主催のクロスカントリー大会の機会に、外国人ランナーを招待するために努力し、大会は完璧な成功をおさめた。一九三八年と三九年に開催されたこの大会では、私たちはソビエト、フィンランド、チェコスロヴァキア、スペイン、ベルギー、イギリスのすぐれたランナーに盛大な拍手を送ったものだ。この時期、不幸なことに、

フランス独占資本はこの目的に反し平和と自由と人民戦線に反対する攻撃を仕掛けた。大資本と財界は人民戦線、平和と自由を攻撃することを選択したのだ。

(一) 当時の労働者スポーツ運動は、RSIとSASIに分裂していたが、FSGTは両組織に加盟せず中立の立場をとりつつ、仲介・調停の役割を演じていた。なおA・ドローヌは、オリンピック理念擁護国際委員会(一九三五年十二月八日創立)に参加し、同時にバルセルナ人民オリンピックの準備にも参画した(F・アッシュユ前掲論文他参照)。

三 地下運動下のA・ドローヌ

—抄訳の理解のために—
FSGTは二つの組織(USSGTとFST)が統一したものであるが、前者の指導者には(ギユルビックなど)年輩のものが多く、FSTの方は不幸なことに青年(A・ドローヌなど)中心で、兵士として動員された。このため、第五回総会(一九三九年四月)で双方の組織から選出された中央役員のパランスが崩れ、USSGT系が多数派となった。FST系の指導者が動員解除によって復帰しようとしたが、残留の中央委員会グループがG・マローヌ会長やA・ドローヌなどを除名・排除した。その一九四一年にギユルビックらがドイツ軍・フランス政府・警察の強迫に屈し、FSGTをUSSGT(労働者スポーツ・体操同盟)と改称し、さらに在バリドイツ軍関係者のコラポへと転落する。ここにいたって、A・ドローヌは、USSGT、政府・ドイツ軍との闘争なくして、スポーツの自主性と

祖国の再建は不可能なところまで追いこまれたのである。

16、逮捕、監禁、脱走

F S G T の変節漢によって侮辱、挑発されたドローヌには、もはや地下運動下の闘争以外に残された手段はなかった。彼は自身のために家族、友人と別れを告げたが、そのころすでにレジスタンスに参加している諸同志たちとの再会を果し、身分を変化させていた。しかし不幸なことに、一九四〇年十二月六日フランス警察によって逮捕されたのである。私たちの同志が、シャトーブリアン、ポアシー中央、アインクル收容所に送られていったことを想いだす。これらの收容所で、ドローヌは全拘禁者のための身体文化の組織化過程で、地下運動下の愛国者との再結合を果し、脱走可能な時期まで心身をもちこたえ、良好な状態を保持することに気を配った。

また彼は、在監中の静養時に死を目前にしていることを知っていたし、一九四一年十月二二日のシャトーブリアン收容所で二七人のコミュニストたちがそうであったように、最近入質となったグループもドイツ軍によって銃殺されるであろう、と考えていた。シャトーブリアン收容所外の援助と細心の準備によって、彼は古い同志「パリのアンリ・ゴーチエ、ナントのゴードン」とともに、一九四一年十一月二日脱走に成功した。

17、地下闘争下の A・ドローヌ

パリにもどると、彼は数人の同志とともに外部との連絡をとった。彼は地下運動紙「自由スポーツ Sport Libre」を創刊し、独立・自由フランスを実現しスポーツ実践の自由をとりもどす

ことを決定したスポーツマンたちによって、配布・販売・拡大が行なわれた。認識経験、勇気に加えて彼は、私たちの地方のレジスタンスの有能な指導者となった。しかし最初に配属されたピカルディ地区は、すでに警察によって捜査網がしかけていたために、彼はノルマンディ地方へ任務変更の旅へ出掛けねばならなかった。すくなくとも六ヶ月後に、彼はブルターニュへ、イール・ヴァレーヌ、フィニステ、モルビアン、ロアール河下流、モエンヌとソース・ド・ロルヌ地方の責任者として到着した。

(1) レジスタンス史研究の定本とされている H・ヌーゲール『フランスにおけるレジスタンスの歴史 4』(ロベール・ラッホン、一九七六)の八六ページに組織としての「自由スポーツ」が登場する。組織と機関紙名の「自由スポーツ」については、パリから送稿した「対独レジスタンスとフランスのスポーツマン、『自由スポーツ』と A・ドローヌのこと」、『スポーツのひろば』一九八七年十月号、と「向大戦間・戦中期のフランスのスポーツ運動の研究」(上・下)『体育科教育』、一九八八年三・四月号を参照。なお地下運動紙「自由スポーツ」については、稿を改めて紹介することとしたい。

18、A・ドローヌと再会

一九四三年春、共産党地下指導部は私にドイツ軍に占領されている北部ゾーンの私たちの地区の指導を委任した。私はブルターニュを訪ねた時にドローヌと再会した。会合は、レンヌで

危険を配慮して開かれた。駅はドイツ軍とフランス警察によって戒備体制がしかれていた。バリ発の列車から私が下車すると、たがいにはちらっと顔をみた。私たちは話をせず、私は彼のあとを追った。やっと非常に安全な場所に来て、彼は私に開くべき会合と別離の場所の住所を示した。彼は私たちの宿泊する予定の熱烈な愛国者の家へ向い、私は気取られないために二、三分の間隔をおいてしたがった。

私たちは二人とも一九三九年九月に動員されたが、戦争のために仲をさかれそして再会したのだった。ファシストに反対する戦前の私たちの闘いは、異なる条件のもとで続けられた。未来に対する確信から、私たちは地下運動の任務を遂行した。私の同志は、私が一九四三年四月一日(二二一号)付の地下運動紙「ユマニテ」の現物を手渡した時、感激した。

タイトルの下の発行年月日を入れた部分のすぐ下に、三行の重要な指示が示されていた。統一せよ！ 武装せよ！ 戦闘せよ！ ドローヌは私に「新聞は真の組織者だ。同志たちを感激させ、動きをスムーズにする」と語った。この会合で、私は、この新地下運動紙「ユマニテ」の指示の具体化のための責務と関連して、今この瞬間の軍事的・政治的状況について詳細にのべた。

私は、行動するために、私ではなく新聞に期待していなかった。ドローヌに話をせねばならなかった。彼は私に「『国民戦線(FFP)』と『自由射手と遊撃隊(FIP)』創設に関する新聞やピラの発行、対敵武装行動の重要性和利害、」などについて

打明けた。さらに計画はつづけられる。ドイツ軍兵士搭乗の列車の脱線、別働隊によるトラック、給油所の破壊、電話線の切断、対独協力企業内でのサボタージュ等々。「君たちのメンバーはどのくらいなの？」という私の質問に、彼は地区ごとの一覧表を示した。政治指導者群、多数の愛国者、共産主義者にたいして、より大胆で何らかのイニシアティブを発揮することは不可避だった。一ヶ月に二回ときめたこの会合で、彼は時として悲観的になりながらも、すばらしい結果を生みだす効果的な局面をつくりだしていった。と同時に逮捕され、犠牲となった同志たちにかわる人びとを送りださねばならず、待つておれなかったのだ。

毎回の会議のたびごとに、私たちは小憩をはさんだり、楽しくしかし質素な食事をともにしながら深更まですごした。多くの決定とともに、私はいつも、警察とスパイが逮捕者を連行する計画を挫折させるために、安全性に配慮することを忘れないようにしていた。

彼を地下の基本交通ルートから遠ざける必要があったし、毎回の会議ごとに不注意や軽率な言動などの悪弊を矯正しつつ、全組織化の各階梯において交通関係の新方法を創造するために、絶えず警戒心をもち念には念を入れて行動する必要があった。彼にとつての問題は、戦士たちの生命を最大限に防衛するということだったのだ。

19、最後の邂逅

指示された会合で、私はドローヌに素晴らしい情報——一九四三

年四月一六日の夜半から一七日にかけて労組の統一が実現し再建されたこと、および五月二七日にCNRが創立されたことを伝えた。二つの出来事は、私たちの地域、地区に好影響をもたらした。つぎに六月に入ってからのだが、私たちは、七月一四日の記念祭にむけて統一行動の組織化と武装行動にたちあがる日の準備について命令をうけとった。占領軍は、バスターヌでの逮捕が愛国者の記憶の中に生々しく残っていることを自覚していた。

ドローヌの作成した行動計画は大胆不敵なものだった。私が注目したのは、彼が私たちの組織と連絡をとることを強調したことだった。町村において計画を実現するためには、新しい愛国者勢力がますます増えることが必要だった。

その間に、ナントで恐るべきことが起った。ドイツ軍とフランス警察は、戦列の中の特定の人物を逮捕する作戦を展開しはじめた。それはスパイたちが会議ででっちあげたもので、私たちは他の逮捕者へのおどしであるとうけとめた。私たちは、毎回の逮捕に関する正確な報告をもとに組織―他に被害を及ぼさないためと、スパイの正体を見破るための―を創立入手することで一致した。この陰惨なやり口を解明可能にする情報を入手する時まで、私はドローヌにナントにもどるな、と忠告し、他の場所での会合場所を指定した。ドローヌは、すばやく同意の回答をよこし、私たちは一番早い会合の日時をきめたあと別れた。しかしああ、何ということだ。彼はその場所にいなかったのだ。

20、ドローヌ、スパイの犠牲に

ナントの状況、そしてマンの同志たちがスパイの犠牲になったことからすれば、彼の逮捕の危険性が迫っているようにみえた。恐しい知らせがパリに急報で到着した。ソースの責任者からの情報だ。それによると「七月二七日、ドローヌが重傷を負い、この村の病院に移送されドイツ軍の監視下におかれている」というのだ。この急報は私たちにとっては辛いものだった。私はPCF地下組織のリーダーからの指令を受取った。それは、ドイツ軍から同志を救出するために、委任をうけてただちに現地へ向かうように、というものだった。マンに到着すると、私はロアール・大西洋地区の書記アンドレからドローヌについての意見聴取を行なった。ドローヌとアンドレとの最終の会合は、彼が党と遮断された位置にいたので極秘の会合として計画された。

この会合は、マンのエミール・ゾラ大通りのクールホール橋とした。ドローヌは何の懸念も抱かなかったのだろうか。日ごろ、彼はソースのFTPの責任者ガストン（本名ジャン・フレズネ）を同道したものだ。橋に着くや否や、待ちうけていた二人の警官は彼が問題の人物だということを知っていたので、二人の同志を撃った。ジャン・フレズネはその場で殺害され、ドローヌは重傷を負いながら、逃げ場を探そうとした。しかし警察たちはもたもたや発砲した。彼は再び立ち上ることができなかった。誰かがゲシュタポに秘密をもらしたのだ。真正正銘の翼は計画的なものだった。このイニシヤティブをとったのは誰だったのだろうか？ 誰が警察に出会いのことをもらしたの

か？ アンドレ以外は誰も知らなかったし、彼はドロースとはナントで地下活動の整理のために規則的に出会っていた。犠牲に関する調査はただちにはじめられた。

21、マンの病院内への潜入計画

早速、私たちは愛国医者とともに重要な接触の道をさがし求めようとした。つぎにFNの同志は、ドロースが軟禁されていると思われる場所の確認のために出掛けた。しかし大きな困難に直面した。負傷したドロースはかかえあげること、動かすこともできなかつたのだ。医者は、私たちに数人でベットごともちあげねばならない、といった。ドロースは、この場上一運搬作業で果して生きながらえることができるのだろうか？ 医者は訝った。その間に十人のFTグループが急いでかけつけた。このグループは、病院の料理用かまどぞいにある牧草用の大きな穴にかくれひそんでいた。その場所から、私たちは愛国鉄道員によって作られた合鍵で門を開け、内部に深く潜入することができた。私たちは歩哨二人を眠らせ、電話交換台を占拠した。攻撃計画は朝のうちの三時間で終り、それぞれが役割を熟知していたので、詳細な部分も定規ではかつたようだった。

あらかじめ用意してあつた一台の車がこの場所に停車することになっていた。この車でドロースをマンから二十キロメートルほどのノワイヨン・シュール・ソースの安全な場所に運び、看護婦をつけ投薬治療をする手筈になっていた。しかし指定した時間に車は到着しなかつた。待機時間は長くはとれなかつた。私たちの不安はつるばかりだった。なぜ遅れるのか？ 私た

ちはレジスタンスのリーダーの救出のために、ほとんどゴール真近かにきているというのに。自動車もなく行動不能となるなんて、とてもたえがたいことだった。苦悶の二十分がすぎた後、私たちは規則正しく巡回してくるドイツ軍歩哨に気づかれないために、沈黙を続けていた場所を去つた。私たちは彼をよく知っていたし、私たちのためにこんなことになつたのだから、どんな代価を払つても救出しなければならぬ囚人だった。

22 無数の努力が灰燼に

ドイツ軍の掌中で彼は従容として死を迎えるというのか？ これは歴然たる事実屈服することだった。私たちは脱出を再度追求する予定に加えてルート・ボンヌターブルを通じて人里離れた隠れ家に武器・弾薬、食料をこっそりと搬入し、FTFのグループが近くで、二、三日見張ることにした。私たちの失望感、ドロースがマン近くのペール・ゴランへ救急車で移送されたことを知つた時に極まつた。ドイツ軍はどんなことをしても彼を訊問しなかつたのだ。ドイツ軍は拷問を加え、彼の活動や組織関係についての情報を入手することが望みだつた。しかし、彼は黙秘をつづけ一言ももらさなかつた。

ゲシュタポは、彼が病院で今日にも重篤状態に陥ち入り死亡することを恐れた。だがA・ドロースは、一九四三年九月二日、死亡した。享年三五歳だった。死亡者名簿には、ポール・ポニファース、推定三二歳、と記載された。残忍な人間どもでも、彼の本名、秘密をときあかすことはできなかつたのだ。ポニファースとは、彼が所持していた偽の身分証明書に記載され

ていた名前であった。

英雄の死から二、三日後に「FTP—A・ドローヌグループ」が編成された。私たちは戦列強化のために「A・ドローヌの同級生」という名の事業をはじめた。侵略者と裏切り者に対する闘争によって、同志の仇を討つという決定はブルターニュの闘士たちを奮立たせた。ゲシュタポとフランス警察に対する宣戦布告は地下運動紙「ユマニテ」に公表されたのである。

四 解放と戦後叙勲——抄訳の理解のために——③

彼の死後、戦局は反ファシズム勢力とレジスタンスの全面反攻の季節となった。一九四四年六月六日のノルマンディ上陸作戦、八月二五日バリ解放、ナチスへの屈服の証しとされたUSGTからFSGTへ、そして一九三九年にバージュされたFST系の指導者が復帰し、USGT内で困難かつ重要な任務を遂行していた同志たちと共同し、コロボに転落した指導者の処分を断行する。明けて一九四五年五月八日フランス全土の解放。FSGTは六月三十日、七月一日の二日間にわたってバリ市役所で再建総会を開催した。そのご、一九四七年一月になり、サン・ドニ市からA・ドローヌにたいする顕彰と叙勲の申請とともに、生き残った警官と裏切り者が特赦による恩恵を受けることに反対し、その資格がないことについて異議申立をした。五月三十一日、国令によりオーギュスト・ドローヌにレジョン・ドヌール勲章が追贈された。彼の榮譽を讃えるために肖像がサン・

ドニ歴史美術博物館に飾られている。この他、彼の偉業を後世に伝えるために、サン・ドニをはじめとしてマン、レイム、イヴリイなどでオーギュスト・ドローヌという名を冠した競技場と通りが誕生した。

一九八五年六月、フランス解放とA・ドローヌへの叙勲の四十周年を記念する式典がサン・ドニで開催され、本冊子も刊行された。

五 おわりに

こんごの課題について。一つは本文中の注でふれてもいるが、FSGT機関紙「スポーツ」と地下運動紙「自由スポーツ」の書誌的整理がある。二つめは、P・モーショ「第二次世界大戦、占領、抵抗：一九三九年から一九四五年までのF・S・G・T」(機関誌「スポーツと野外」、一九七五、七・八月号)の訳出である。この訳出によって、今回の抄訳によるA・ドローヌはフランス政治とスポーツ運動の全局面における正当な地位を回復するであろうと思われる。またA・ドローヌが「オリンピック理念擁護国際委員会」と関係したことともあわせて、バルセロナ人民オリンピックへFSGTがどのように関与したのか、ということも興味をそそられる点である。川成洋『もう一つのオリンピック』(筑摩書房)の近刊予告が発表されているだけにその感一入である。

(一橋大学講師・武蔵野美術大学教授)